

一橋大学での百田尚樹氏講演中止事件の怪

平和と安全を求める被爆者たちの会

副代表 池中美平 平成 29 年 7 月吉日

【講演会妨害事件のあらまし】

私達は、「8.6 広島平和ミーティング実行委員会」に協力する団体である。今年**は百田尚樹氏を講演会の講師に招聘した**。百田氏には、平成 29 年 6 月に一橋大学で予定されていた講演会が反対運動で中止になる事件が起こった。主宰学生団体が恐怖したからである。事件は百田氏が積極的にツイッター発信したので、少しだけ報道された。かつては、櫻井よしこ氏にも同じ事件があった。平成 9 年 1 月 29 日予定の三浦市商工会議所主催；「新春経済講演会」が 28 日に突然中止された。民間団体である「神奈川県人権センター」の“抗議”が原因だった。ともに**身勝手に薄弱な「理屈もどき」が勝利したのだから世間の歪みは健在だ**。私達も、広島市行政当局から事実上の中止圧力を受けたことがある。百田氏も櫻井氏も断固戦った。私達もそうだった。とすれば、昨年、一昨年と櫻井よしこ氏を、今年**は百田尚樹氏を招聘した私達は、同志的敬意をもって講演会を実施する決意は、より固まった**。

【抗議内容も手法もデジャブ】

公開情報から探ると、講演を企画した学生たちに圧力をかけたのは、一橋大学院生の梁英聖氏が率いる「**反レイシズム情報センター (ARIC)**」だった。石平太郎氏のツイートを要約すると『件のデータベースに吃驚。小池百合子さんや竹田恒泰さん、呉善花さん等、多くの人々の発言が「レイシズム言論」に勝手に認定・登録されている。日本で監視社会を作ろうとしているのは安倍政権でもなければ「**共謀罪法**」でもない。こういう人々である』と。検索すると一般紙誌に掲載された論考までも、何十年前の死者の発言までも「レイシズム」に“登録”されている。我々には理解不能の精神構造を持つ彼らが、他者に悪意のレッテルを張って不当な「抗議」に及ぶことは異常な「**自己絶対主義**」である。大学当局が他人事扱いしたのは、表現の自由を守るはずの「**大学自治**」が彼らの支配に屈したことになる。百田氏自身の詳細説明と櫻井氏の要点を本編後半に引用して、事態の重大性と事実関係を知らしめたい。

櫻井事件では「神奈川県人権センター」が「**従軍慰安婦問題で差別的発言をした櫻井さんを招くことは参加者に悪影響を与える**」とした。その前年にも同センターは、櫻井氏の綿密な調査で『**「従軍慰安婦」の“強制連行説”**』を反証した「**横浜市教委**」での講演にも「**差別的発言だ**」と“抗議”している。**両者に共通するのは、まず人格を蔑むレッテルを張って、表現の自由を阻止する手法**であり、百田氏まで 20 年、同じ手法が使われてきた。「**ヘイトスピーチ**」が活動家の活発な地方で猖獗を極めるのは、同じ言論封殺工作だとみるべきだろう。**川崎市は「ヘイトと認定された団体」には街頭行動を不許可にするという。「人権主義者」の憲法無視がここまできた**。

【日本ペンクラブ】

柳美里氏のサイン会中止事件は、報道が乱舞し、日本ペンクラブが極め付きの批判会見まで行った。しかし、櫻井氏や今回事件を含む諸事件に同組織が批判声明を出したことを知らない。**表現の自由を存在根拠にする作家団体が、被害者の顔ぶれで態度が変わるのなら、その主張は軽薄で身勝手な行動にしか映らない**。「テロ準備罪」批判会見も恣意的だったのだろう。／／

<百田氏の発信要点：池中抽出>

▼ARICは、「人種差別主義者である百田尚樹に講演させるわけにはいかない」という理由で、2カ月にわたって執拗に「講演中止」を要請していました。

▼「脅し」すれすれの言葉を使っています。「われわれと別の団体の男が講演会で暴れるかもしれないと言っている。負傷者が出たらどうするんだ？」ある女子学生が「百田尚樹の講演を聞いて、ショックを受けて自殺するかもしれない。その時は実行委員会としてどう責任を取るつもりなのか？」

▼ARICの実態は不明です。活動のメインは、出版物や新聞、ネットなどから、「差別発言」を探し出し、それをデータベース化することです。私をはじめとする120名を超える文化人や政治家など2700を超える発言が、「差別発言」として認定され、その中には故人の発言もあります。しかし、発言のほとんどは差別とは何の関係もないものです。

▼私のツイッター上の発言を恣意的に解釈して「百田尚樹はレイシストであり、差別扇動をする者」というレッテルを貼り、そんな人物に講演させるわけにはいかないと言い出したのです。

▼彼らのルールそのものは実に不当なものでしたが、中でも一番驚いたのは、以下の要求です。「百田尚樹氏講演会『現代社会におけるマスコミのあり方』に関しては、百田氏が絶対に差別を行わない事を誓約したうえで、講演会冒頭でいままでの差別扇動を撤回し今後準公人として人種差別撤廃条約の精神を順守し差別を行わない旨を宣言する等の、特別の差別防止措置の徹底を求めます。同時にこの条件が満たされない場合、講演会を無期限延期あるいは中止にしてください」啞然とするとは、まさにこのことです。呆れ果ててモノも言えません。

▼たとえば、次のような発言もヘイトとして認定されています。

「特攻隊員たちを賛美することは戦争を肯定することだと、ドヤ顔で述べる人がいるのに呆れる。逃れられぬ死を前にして、家族と祖国そして見送る者たちを思いながら、笑顔で死んでいった男たちを賛美することが悪なのか。戦争否定のためには、彼らをバカとののしれと言うのか。そんなことできるか！」

▼彼らは「差別反対」「ヘイトスピーチ反対」を錦の御旗として活動しています。しかし差別やヘイトの定義は曖昧です。彼らのヘイト認定は実に恣意的です。恐ろしいのは、ARICは自分たちが「差別主義者」と認定した人物は、発言を封じて構わないと考えていることです。

▼この事件は第三者的には、たいした事件ではないのかもしれませんが。しかしながら、この事件は危ないものを内包しています。この事件を多くのマスコミが見逃せば、やがてこういう事例が頻繁に起こることになるでしょう。気が付けば、自由に発言できない空気が生まれているかもしれません。そうなった時、「ああ、あれが最初だったか」と思っても、その時はもう手遅れです。

＜櫻井氏の主張要点：平成9年3月号雑誌正論「強制連行の矢面に立って」より要点抽出＞

▼平成8年10月3日に横浜市教委で講演した。「慰安婦は確かに居た。意に反してなった者も居る。しかし日本政府や軍の政策だったと示す資料は見つかっていない。だから強制連行が日本政府や軍の基本政策だと決めつけるのは疑問だ」と言ったら、かながわ人権フォーラムから「強制連行は無かったと全否定した」という主旨で抗議がきた。(筆者：朝日の吉田宣伝は異常だった)

▼「強制連行はなかったと発言した悪い女」「講演を聞いた先生の心を傷つけたから謝罪して訂正せよ」などの抗議が櫻井氏に殺到した。しかし、聴講の先生からはそんな質疑は全くなかった。自分たちの意見と違うものに激しく反応して排斥してく。そうなればこの国の言論はどうなるか。

▼講演が終わって1ヶ月以上たってから急に動きが出てきた。横浜の教職員組合から、10月3日の講演内容がけしからんから11月18日までに謝罪して訂正せよ、という高飛車な内容だった。事務所の営業日関係から手元に届いたのは18日の期限当日だった。「今日は取り込み中で忙しいから時間を下さい」と言った。

▼10日後の11月28日に機器トラブルを経験しながら届いたFAXには「10間待ったけれどどうともすんとも返事がないので、もう謝る意思はないとおもうので、今後はありとあらゆる機会をとらえてあなたたが正しい歴史認識を身に付けるまで、糾弾していく」とあった。

▼12月2日になって、記者会見をしたいと言ってきたが、寝耳に水のことだったので、一方的な記者会見となったようだ。

▼このような「抗議」に遭ったのは初めてだったが、ほとんど同じ文面のはがきが続々と届き始めた。なんらかの「指導」や「サゼッション」があったと考えられる。ジャーナリズムの世界で生きていくと、異論や反論は日常茶飯事だが、その場合は自分の頭で考えて、自分の言葉で表現するのが、民主主義に生きる人間の存在意義であろう。それが軽視されているのはもったいないし残念だ。

▼たとえ罵詈雑言であろうと、それが自分の言葉で表現されていれば、自筆で返事した、それ以外はワープロで同一文面にした。——以降は旧ソ連の抑留関係になったので、終わる——

※筆者感想：個人的感情から気に入らない者を抹殺する手法は、最初に醜いレッテルを敵に張り付けるのが今も昔も変わらない。「ヘイトスピーチ抑制法」は一定の集団に利用されているようだ。私達も、今ある現象を詳細に分析して表明したら、特定少数の個人の「想い」を傷付つけるという批判を受けてきた。「水は上から下に落ちる」と言えば、感情を害するから謝罪しろ、という類の理不尽な批判である。だが、未来を拓くのは現実の正確な認識以外にはない。批判される人物のうち、私達が「批判は理不尽」と理性的に判断する人々をこそ、尊重していこうと思う。百田氏も櫻井氏も、それ以外の過去に招聘した方々はそれに叶っている。